

ブラウニング『男と女』より

訳・船 木 満 洲 夫

一 生 の 愛

1

部屋から部屋へと、
私たちがいっしょに住んでいる
その家の中を私は探しまわる。
心よ、何も恐れるな、というのは、心よ、おまえは見つけるのだから、
今度こそ、彼女そのものを！——カーテンに残った
彼女の通ったあとの揺らぎとか、寝椅子の香りではない！
彼女がかすかに触れると、軒蛇腹^{じやばら}の花輪は新たに開花し——
向こうの姿見は帽子の羽飾りの揺れに光り輝いた。

2

だが日はだんだんと暮れ、
ドアのあとにまたドアがつづく、
私は新たな運試しをする——
広い家をその翼^{よく}から中央へと歩きまわる。
それでも変わらぬ運！ 私が入ると彼女は出て行く。
こうしてまる一日探索に費やすとしても——構うものか？
しかしもう薄暮れ、なのだ——調べるスウィートがいくつもあり、
探す小部屋も、寄らぬわけにはゆかぬ奥の私室も数多い！

愛 の 一 生

私から逃げるのか？

それはならぬ——

恋人よ！

私が私で、おまえがおまえであるあいだは、

この世に私たち二人がおり、

恋する私と嫌がるおまえが存する限り、

一人が逃れもう一人が追わねばならぬあいだは。

私の人生は結局、失敗なのだろう——

実際のところ、これが運命というものか！

私が全力を尽くしてもまず成功しそうもない——

しかしこの世で私の目的が果たせなくてもどうだというんだ？

それはただいつも神経を緊張させ、

失敗すると涙をぬぐって笑い、

挫折しては、起き上がって再び始める——

こうして追跡が一生を占める、それだけのこと。

ところが、おまえのいる遠く離れた場所から、ひと目見てくれ、

塵と闇に深く落ちこんだ私を、

今までの古い希望が地に落ちるか落ちないうちに

まさしく同じ目標にまっすぐ向かって、新しい希望を、

私は自分に作る——

永久に

隔たった者よ！

同時代人への印象

私は生涯でたった一人の詩人を知っていた、

彼の行ないぶりは、あれこれ、こんなぐあい。

バリャドリードの街を行き来するのを見たが、
 二度目は見ればすぐわかる、目につく人だった。
 彼の非常にもちのよい黒地のスーツは
 もとは宮廷風の優雅なもので今でもきちんとしていて、
 もう着る者はなかったが、たくさんの者が着たらしい、
 少し擦れて光沢が出て糸目の見える外套は趣きがあり、
 そして^{ひだえり}襷襟も意味ありげだった。
 彼は出歩くと杖で舗道を叩きながら
 世の中のおい^かを嗅いだり、まともに眺めたりし、
 頭に毛のない盲の、老いた犬を、うしろに連れていた。
 時には、教会のわきの、どこにも通じない路地に、
 現われたり、時には、ちょうど間の悪いときに
 主要遊歩道でひと息入れたりするのだった。
 ひょっと見かけるのは、じろじろ見つめる彼の帽子が、
 朽ちたムーア式細工のまだそのままの
 どこかの家のとっておきの一つの窓に
 帽子そのものより黒い先の尖った影を映している様子——
 でなければ新築中の、見事なフランス風の店の
 すき間のあいだのモルタルの粘稠度^{ねんちゆう}を
 杖の石突き^{いしづ}で探っているのを見つける。
 彼は仕事をしている靴直しや、
 飲みものにレモンを薄切りにして入れる男や、
 コーヒーの焙煎器^{ばいせん}や、その取っ手をまわすのを
 自発的に手伝おうとする少年たちをじっと見ていた。
 彼は屋台の上の本や、呼び売り人が紐に通してもっている
 片面刷りの民謡や、壁のあたりのへりの広い
 図太く刷った広告ビラを何げなくちらと見た。
 彼はこのように人や事物を観察したので、
 だれかが馬を打てば、それを見てとるし、

だれかが女を罵^{ののし}れば、それに気がついた、
だけどだれを凝視するのでもなく——彼の方が凝視された、
人は楽しむよりもむしろ驚く、そのことに彼は気づき、
自分は人を知り人も自分を知っていると思っているようだった。
そこで、次には隣人の口がゆるみ、
恥ずべきよくない事実^{のし}に注意を向け、
われわれの中に、スパイとまではゆかなくても、
行状を記録する主任検査官や、
町民が知っている町の実際の支配者がいるのだった！
われわれにはただ形式上の長官がいるだけで、
この男は歩きまわってはあらゆる人の考えを
その言葉も、その行為も考量して、それから家に帰り、
そしてわれわれの主・国王に抜かりなく書き知らせると
国王はどういうわけか、事情を知りたくてならなくなり、
そして夜の自分の寢床でそれを読む。
おお、おまえは笑うのか！……の気味が、
独特の味がなくもなく、その男の顔つきが
おまえの心にまた浮かぶと平気ではおれなかった——
少し寄る年波で陰しくなって——突き出した額の下に
彼の眼は光らねばならなかったのだ！——驚の爪のように
曲り、鋭く尖り、赤らんだ、
その恐ろしい鼻の両側に
火打ち石のように冷たく澄んで。
彼はAの驚くべき運命と関わりがあったのか？ 年寄りのBが全く姿を消し
若いCが妻を得たとき——この友人、
その国王への手紙が、そういうことに与ったのか？
この非情な男はそれほどの苦勞にどれほど代償を払ったのか？
われわれの主・国王は多くの寵臣をもち、
月に大体一度ほど内閣を変える、

われわれの市も時おり新しい長官になる——

しかし真夜中に国王がきちんと最後の勤めとして

精読するそれらの手紙に対する是認が

街によく見かけるこの男に通報されたという

どんな言葉も形跡も、私は聞けなかった。

この男はその役目が好きだったのか？ 国王は眉をひそめて、
だれも聞いていないとき戒めたのか——「嘆願しないでくれ！

人民とかけ離れて——わしの直属だということのか！

わしは見張り役を命じる——人民がどうして知ろうか？

彼らの対し方は気にせず、わしをいっそう心にとめるよう！」

二人のあいだに何かこういう了解があったのか？

私は少なくとも一つの噂^{うわさ}に真実を認めなかった——

彼の家まで跡をつけて行くと、ユダヤ人地区の向こうの

歩くのにはきれいさの変わらない小道を下りると、

壁に四枚のティチアーノの絵がかかり、灯りの煌々^{とうとう}と輝く

そういう部屋で、二十人の裸の乙女に

皿料理を変えさせて夕食を食べるとの噂には！

あの新築の、漆喰^{しつくい}を塗った、橋のそばの三番目の家、

新しくペンキを塗った、どちらかと言えば小ぎれいな家で

この哀れな男は、別の種類の生活を送っていたのだ！

通り全体から彼が座っているのが見下ろせるが、

脚を組み、片足を犬の背において、

女中とおとなしいクリベッジ遊びをしていた

（ジャシンス、というのが確か彼女の名前）

チーズや果物、赤い栄養不良の冬梨の半切れ三つ、

または四月のラディッシュのごちそうを食べながら！

九時——十時、教会の鐘が時を打つと、彼は直ぐに寝た。

私の父は、分別のある人にふさわしく、
何度も私に彼の方を指差してくれたものだった、
「シッ——シッ、市長さんだ！」とささやいたのだった。
私はかねてからその名士は
^{うるし}漆革の股引き、光沢のある帯、
突っ立った羽毛の帽子をつけた人、
らっぱを吹き情報を布告し、
闘牛を予告し、各教会に順番を割り当て、
当時流行の奇跡を語る人とはばかり思っていた！
彼は私たち少年の大きな尊敬の的だった——
私の思い違いで、その人ではなかったのだ。

今思えば、この男が死に臨んだとき、だれが
番兵を交代させる神々しい態度で、
清潔で明るい屋根裏部屋の壁ぎわに並び
こぎれいな低い車付きの寝台のところに立ったのか、
ちょっと見ておけばよかったが、それも恐ろしいことだっただろう。
考えてもみよ、ここに参謀長の詩人は、
この世の生と死の戦闘全体を通して、
見通しのない一日のあいだじゅう国王の仕事をし、
古い上着をまとい、膝まで泥だらけになって、
^{にしん}鯡のように燻され、パンくずを食事にとった——
そして今や勝利を得たので、直ちに解放されたのだ！
これから先は、一例を言うならば、
あの古い上着は見せもせず必要ともしない、
このことは確かだ！　まあ何と、こうしているあいだじゅう
私たちは何とこぎれいな衣服を着ていることか、おまえと私は！
寸秒のうちに、天使たちはそれを一変してしまうのだ。
ところで、私は全然詩が書けなかった——おまえは書けたか？

今からブラドウ通りへ行って存分に楽しもう。

二人の最後の遠乗り

1

ぼくは言った——それで、愛する者よ、そういうわけだから、
今になってついに自分の運命を知ったのだから、
ぼくの愛がどうしても役立たないのだから、
予定されていたはずの生活がすべてだめなのだから、
 これが運命でどうしても避けられないのだから——
ぼくは心のたけをこめて奮い立ち
誇りと感謝の念でおまえの名を祝福する！
おまえが与えてくれた希望を引き取ってもらいたい——
ぼくは希望の思い出だけを自分のものとしよう、
——なおまた、もしおまえがとがめないなら、
 もう一度ぼくとの最後の遠乗りを許して欲しい。

2

ぼくの恋人は彼女のあの眉をひそめ、
同情心がやさしく漏れようとするとき
誇りがためらうあの濃い黒い眼を、
じっと向けて瞬時ぼくの身動きをできなくし
 生とも死ともどっちつかずの状態でいると——行きましょう！
血が再びぼくにいっぱいに満ちあふれた、
ぼくの最後の思いは少なくとも空しくはなかった。
ぼくと恋人は、馬を並べて
二人いっしょに、息をし遠乗りする、
そこでもう一日ぼくは神のように幸福に浸れる。
 この世が今夜のうちに終わるかだれにわからう？

3

静かに！ もしおまえが胸の波打つ西の雲

多くの祝福を——太陽と

月と宵の明星の祝福を同時に——

弓形に受けた西の雲を見たならば

そうして、おまえが、でき得る限り見とれ愛し、

雲、日没、月の出、星の光りも

おまえの情愛が、いよいよ間近に、

おまえの方に引きつけるのを、意識すると、

天国に近いのだから肉体は消え失せるにちがいない！

こうした思いに傾き彼女はためらいを感じた——何たる喜びと恐ろしさ！

このように彼女は一瞬ぼくの胸にあった。

4

それからぼくらは遠乗りに出た。ぼくの魂は

穏やかに和らぎ、長いあいだ畳みこまれた巻き物

そういう魂が生き生きと風にはためいた。

過去の希望はすでに背後に遠のいていた。

不首尾の人生と何を張り合う必要があろうか？

ぼくがああ言ったら、またこうしたら、

よかったかもしれぬ、よくなかったかもしれぬ。

彼女がぼくを愛したかもしれぬって？ 全く同じように

彼女は嫌ったかもしれぬさ——だれにわかろうか？

最悪のことになっていたらぼくは今はどこにいるだろう？

だがここにぼくらは馬に乗っている、彼女とぼくは。

5

言葉や行為で、失敗するのはぼくだけだろうか？

そりゃ、人はみんな努力するがだれが成功する？

ぼくらは馬に乗った、ぼくの心は飛翔し、
別の地域、新しい都市を見る思いだった、
世界が両側で勢いよく突進して行くとき。

ぼくは思った、すべての労働者は、にもかかわらず
不成功であっても失望しないで我慢すると。
仕事の結果を見よ、成就した些細な^{きさい}ことと
成就しなかった大量のこととを比べよ、
それらの現在と希望に満ちた過去とを！

ぼくは彼女が愛することを望んだ。ぼくらは馬に乗っている。

6

どんな手と頭とがいつも組みになったか？
どんな心が思いつくだけでなく挑んだか？
どんな行ないがその思いついたことを立証したか？
どんな意志が肉体の邪魔を感じなかったか？

ぼくらは馬に乗りぼくには彼女の胸の波打つのがわかる。
多数の王冠が手の届く者のために存在する。
十行、その各行に政治家の生涯が記されている！
骨の山に立てられた旗は、
兵士の行状！ どんなに償われたか？
大寺院の墓碑にその名が刻まれる。
失礼ながら、ぼくの遠乗りの方がよい。

7

詩人よ、一体どういう意味だい？ なるほど、
おまえの頭脳は律動的に動く——おまえは
ぼくらが感じるだけのことを語る、おまえは
美しいものを最善と考えると述べたし、
それらを並べて、そのように律動を整える。

それは大したこと、いや驚くべきこと——だが、
おまえ自身人間の最善のものをもっているのかね？
おまえは——貧しく、病弱で、年よりも老けていて——
詩一つ作ったこともないぼくらよりも
おまえの言う崇高さに少し近いのかね？
歌え、馬に乗るのは喜び！ ぼくは、馬に乗る。

8

そしておまえ、偉大な彫刻家よ——長年のあいだ
芸術に尽くしてきた、芸術の虜^{とりこ}よ、
あれがおまえの女神——ぼくらはそれより
流れを渡る向こうの少女の方へ向かうとしよう！
おまえは認めているしぼくが愚痴をこぼすことがあろうか？
それで、音楽家よ、おまえ、楽譜のために白髪になり
他に何一つ言うこともないおまえ、
一人の友人からの唯一のほめ言葉はこうだ、
「彼のオペラの調べは意図は大いによいが、
しかし音楽は流行からはずれているではないか！」
ぼくは青春を捧げた——だが結局、ぼくらは馬に乗る。

9

何がぼくらに適しているかだれにわかろう？ 運命が
この世の幸せはぼくの存在を純化すると申し出ても
ぼくが運命との契約書に署名しても——
それでもあの世の生活は送らねばならぬ、
——漠然と感じとれる幸せ、それをもって死なねばならぬ。
この足を一度目的地に下ろしたとき、
この栄光の花環をぼくの魂のまわりにつけたとき、
ぼくはあの幸せを見出せようか？ 試みにやってみよだって！

ぼくはこの探索からたじろぎ消沈する——

この世がこうもよい世界なのに、天国が至上と思われようか？

今や、天国と彼女はこの遠乗りの彼方に存在する。

10

しかも——彼女が話し出してからそう長くはない！

もし天国が、こうだとしたらどうだろう、人生の至上

そこに美しく強く、人生の幸せの花を

初めて認めたその方を見上げて、

ぼくらが、離れずに、この状態をつづけるとしたら？

もしぼくらが、ぼくら二人がなおも馬に乗りつづけ、

人生が永久につづきながらしかもいよいよ新しく、

性質は変わらないが程度が高くなり、

瞬時が永遠になり得るとしたら——

そしてぼくと彼女が馬に乗り、二人いっしょに馬に乗り、

永久に乗るということを天国が立証するとしたら？

〔ロバート・ブラウニング『男と女』より〕